

生活文化の教材化（その4）

— 高等学校家庭科保育領域：「子生み、子育てを考える」の学習内容構想と展開 —

永原 朗子*

Towards Making Instructional Materials Which Relate Traditional Culuture
to Daily Living in Japan (part 4)

— The Plan and the Development of Teaching "A Study on Birth and Nursing" —

AKIKO NAGAHARA*

(Received November 21, 1994)

キーワード：生活文化 産育習俗 通過儀礼 子生み 子育て

はじめに

新学習指導要領（1989年改訂）によって、高等学校家庭科（以下高校家庭科とする）3科目「家庭一般」「生活一般」「生活技術」は、それぞれの目標に即して学習内容が構成された。

保育に関する内容をみると、「青年期の生き方と結婚」に関する内容と「親としての役割」に関する内容が、3科目に共通して含まれており、高校家庭科の保育領域では、愛と性、結婚に伴う男女の責任、そして家族計画や人格形成として重要な保育環境の学習を通して、親の役割を自覚させることが中心となっている。これは、幼児が中心の学習であった中学校における保育領域と大きく相違するところである。

また、高校家庭科は男女が共に学ぶ教科となったことから、結婚、妊娠、出産に関しては、父性、母性の両面からの学習、また、男女両性による子育ての学習を基本として、それぞれ父親、母親としての役割を認識させていく学習内容の構成が図られている。

ところで、子どもを生み、育てることに関しては、大正末期まで最高だった乳幼児死亡率が昭和に入り、除々にではあるが低下し、特に、高度経済成長と共に衛生水準の大幅な向上や、健康診査や保健指導をはじめとする母子保健対策の推進、改善等によって、世界でもトップクラスに入る低値を示すに至ったことから、現在では、昔とは比べものにならない程、安定したものになったと考えられている。しかし、一方では、モノやカネは豊かになったけれども、ヒトやココロの結びつきが極度に薄くなった現在では、昔と比べるとますます子どもを生み、育てることへの不安がつきまとい、「孤独と競争の子育て」という暗黒の世界に投げ込まれやすい時代になつているとも言える。

* 山口大学教育学部家政教育

このようなことから、本稿では、既報^{1), 2), 3)}の調査に見られる金沢市の鬼子母神における子生み、子育ての産育信仰を参考にし、狭い意味での教育学、心理学、医学などの分野からの知見にとどまらず、広く、日本で長い間、継承されてきた子生み、子育てに関わる生活様式や習俗、儀式（通過儀礼）などを含む伝承文化（伝承行事）、また、その背景となっている子どものとらえ方（子ども観）や保育の知恵の中からも子生み、子育てのためのヒントや方法を学び、親の役割を自覚させたいというねらいから、「子生み、子育てを考える」をテーマに学習内容の構想を図り、授業設計と展開を試みた。

1. 学習内容構想の視点

「世界子供白書」（1992年版）によると、日本は世界中で5歳未満の死亡率が一番低い国である。（1000人中6人）これは、高度な医療技術、豊富な薬品、制度化された母子保健や予防接種、検診のシステム、そして豊かな食生活、母親の高学歴化等、生活環境や栄養状態の著しい改善が保健衛生と育児のレベルアップを持たらしたのである。そして、社会的な安全と平和の維持、経済的な安定と発展、教育制度の確立と就学率の高さは世界有数であり、このような社会、経済環境ならびに教育環境からして、日本は子生み、子育てに関しては安心国であるかのように見える。しかし、あふれるようなモノにかこまれた豊かな生活の裏では、子どもの自殺、いじめ、登校拒否やアトピー、アレルギーなど心身にわたる子どもの問題状況が発生し、また受験競争に伴う過度の塾通いや教育文化産業の普及に伴い、子どもの自由な遊び時間が喪失している。さらに、地域の子育て環境の悪化、少子化に伴う兄弟姉妹の関係の消失、地域における子ども集団、子どもの人間関係の稀薄化等々、子どもをめぐる諸問題が多々発生している。また、親側としても出産費用、保育料、教育費の高騰、女性労働と出産、子育ての社会保障の不整備による生みびかえ、労働の忙しさ、単身赴任などによる親子のふれあいの稀薄化などの諸問題が発生している。

そしてこれらの問題は、特に1960年代以降、急速化しており、子生み、子育ての科学的、近代的な発展が持たらした現象を見ると、本当に安心国なのだろうかという疑問が生じてくるのである。子生み、子育ては、ごく私的な領域におかれているかのように思われながらも、確実に、公的なネットワークの中に編入されつつある。

社会的認識が高まり、自己の価値観、人生観が形成されつつある高校生にとっては、就職、進学をひかえ、一人の生活者として自立し、近い将来に実現するであろう結婚を実感出来る時期であり、また、妊娠、出産、子育てに対する関心を高めると共に、不安と喜びのはざまに揺れる時期でもある、

その意味で、上記の状況は、高校家庭科保育領域の学習内容に大きな意味を持つと考えられる。

このような状況から、まず第一に、現代の子生み、子育て観にある「原因—結果」という因果関係のはっきりしたものから、何か不透明とも思われる不思議な感触をもつ人間が守り伝えてきた知恵の大切さを、学習の中に盛り込むことである。つまり、近代化によってプラスの要素も確かにあったが、失われてしまった部分に何か、今日の日本人にとって大切なものがあつたのではなかつたのだろうかという視点から、児を中心とした習俗や儀式、その背景となっている子ども観から、その今日的意義を探り、現代の子生み、子育てについて考えてみたい。

第二としては、高度経済成長期の育児思想、育児法によって持たられた諸問題から、

その背景を探り、真の子生み、子育てとは何かを考えさせることである。

まさに人的能力開発政策である教育の過熱、受験戦争は、「少ない子どもを良い子に育てる」というスローガンのもとに、子どもたちは今、医療・保健衛生と教育・学校の二重の制度の中で、育児に専念する親（特に母親）のみによって育てられ、人の成長というものがもつエネルギーやあいまいさを失わさせているのではないだろうか。

人の成長、すなわち人格形成は、人間の一生における乳幼児期の重要性（生命の危険）と母との関係、家族、地域社会の人々との関係の中でなされるものであることを、我々の祖先は、体験的に確認しており、習俗や通過儀礼を通して強固なものにしていった。かつては、母と子の孤立した関係の絆のみに集中するのではなく、母と子が家族、地域、社会の中で育てられていくような関係や環境が用意されていたのではないだろうか。

知性者としてのみでの人間ではなく、感性や倫理性や社会性などを合わせ持つ人間を育成することこそ、今日の子生み、子育てに求められているのではないだろうか。

子どもの人格形成から、人と人との結びつきとしての環境の大切さを重視したいと考える。

以上の視点に立ち、高校生の発達段階との関連で、学習内容の構想を図りたい。

2. 学習指導要領および家庭科教科書にみる学習内容

表1は、1989年改訂学習指導要領の高校家庭科3科目「家庭一般」、「生活一般」、「生活技術」の保育領域にかかわる学習内容である。

表1. 家庭一般、生活一般、生活技術の保育領域の学習項目

家庭一般	生活技術	生活一般
<p>乳幼児の保育と親の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 青年期の生き方と結婚 ・ 母性の健康と生命の誕生 ・ 乳幼児の保育 ・ 子供の人間形成と親の役割 	<p>子供の成長と親の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 青年期の生き方と結婚 ・ 乳幼児の成長と生活 ・ 親の役割と家庭教育 	<p>子供の成長と親の役割(必修)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 青年期の生き方と結婚 ・ 乳幼児の成長と生活 ・ 親の役割と家庭教育 <p>乳幼児の保育(選択)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 母性の健康と生命の誕生 ・ 乳幼児の発達と心理 ・ 乳幼児の生活と遊び

それぞれの科目について説明を加えると、まず家庭一般では、親の役割の重要性を認識させると共に、保育に関する基礎的な知識と技術を習得させ、心身とも健康な子どもを育てることの出来る能力と実践的な態度を育てることをねらいとして、「乳幼児の保育」を中核とし、「青年期の生き方と結婚」「母親の健康と生命の誕生」「子どもの人間形成と親の役割」の学習内容を関連させる題材を取り扱うように工夫するとしている。そして、指導上の留意点としては、青年期の生き方、生命の誕生、新生児から幼児までの保育などの学習をとおして、親の役割の重要性に気付かせることをねらいとして、子どもを生ま育てることの意味、誕生の神秘さ・尊さ、一人ひとりがかかけがない存在であることに気付かせ、現在の生活を振り返り、将来の生き方に対する前向きな姿勢をもつようとするとしている。

生活一般では、共通領域として、青年期の生き方や乳幼児の成長に関する学習をとおして、子どもの健全な成長に果たす家庭および親の役割の重要性を理解させ、将来、親となるものとしての自覚と自らの健康を管理する実践的な態度を育てることをねらいとして、「乳幼児の成長と生活」を中核とし、「青年期の生き方と結婚」「親の役割と家庭教育」などの学習内容を関連させる題材を取り扱うように工夫するとしている。

一方、選択領域としては、共通領域との関連をはかった上で乳幼児の生活、遊びについて、家庭における保育を中心に取扱い、心身ともに健全な子どもを育てることが出来る能力と実践的な態度を育てることをねらいとして、「母性の健康と生命の誕生」を踏まえて、「乳幼児の発達と心理」および「乳幼児の生活と遊び」の実習を取り扱う題材を工夫するとしている。そして指導上の留意点としては、共通領域では、青年期の生き方や乳幼児の成長に関する学習をとおして、親の役割の重要性に気付かせることをねらいとして、子どもを生ま育てることの意味、乳幼児期の重要性、子どもの成長にとっての親子の関係などに気付き、現在の生活を振り返り、将来の生き方に対する前向きな姿勢を持つようとするとしている。また、選択領域では、乳幼児の生活と遊びに関する実習を中心に、母性の健康、生命の誕生、乳幼児の発達と心理などについて指導するとしている。

生活技術では、青年期の生き方や乳幼児の成長に関する学習をとおして、子どもの健全な成長に果たす家庭および親の役割の重要性を理解させ、将来、親となるものとしての自覚と自らの健康を管理する実践的な態度を育てることをねらいとして、「乳幼児の成長と生活」を中核とし、「青年期の生き方と結婚」「親の役割と家庭教育」などの学習内容を関連させる題材を取り扱うように工夫し、特に、ここでは健康な成長、発達のための子どもと親との関わりについて理解させることに重点を置くようとしている。そして指導上の留意点としては、青年期の生き方や乳幼児の成長に関する学習をとおして、親の役割の重要性に気付かせることをねらいとして、子どもを生ま育てることの意味、乳幼児期の重要性、子どもの成長にとっての親子関係などに気付き、将来の生き方に対する前向きな姿勢をもつようとするとしている。

以上のように、家庭一般では「乳幼児の保育と親の役割」、生活一般では、共通に履修させる内容として「子どもの成長と親の役割」と選択して履修させる内容として「乳幼児の保育」、そして、生活技術では「子どもの成長と親の役割」の大項目のもとに構成されており、科目ごとに内容に違いが見られる。しかし、3科目に共通して含まれている内容は、「青年期の生き方と結婚」「関する内容と「親としての役割」に関する内容である。

従って、どの科目を選択しようとも、共通の学習目標の上に立った学習内容の設定の検

討が必要と考える。

一方、家庭科教科書は現在6社から発行されており、いずれも文部省の検定を受けて学習指導要領に沿った内容に編成されている。ここでは、学習内容の細部についての考察は省くが、H6年度用の各社の保育領域の学習内容を見ても、本稿の学習内容の構想を組み入れた教科書はない。但し、一社のみ、家庭一般および生活一般の研究課題に、本稿の題材の設定がされている。

3. 日本の産育習俗、通過儀礼にみる子生み、子育て

一人の人間が生まれるということは、その死と同じ、あるいはそれ以上の重さをもつ。そして、子どもを育てる営みは、人間のごく基本的な暮らしの営みのひとつである。

この子生み、子育てに対して、日本の親（母親、祖母）たちは、どの様な心がまえで受け止め、育ててきたのだろうか。また、この営みは一家だけでなく、地域の人々との関わりの中で行われてきていることから、地域の人たちもまた、どの様な関心と期待をもっていたのであろうか。

日本古来の行事の中に、子孫繁栄のための、よりよい子どもの成長を願って伝承されてきた「子育ての知恵」を見てみたい。

（1）民族学による産育習俗、通過儀礼の調査

「小児が初めてこの人生にお目見えしてから、いよいよ一人前として世の中へ出るまでの間、一家、一門、一郷の人々からどんな待遇を受けるのが普通であるか」（柳田、1970 f : 240）という柳田の関心のもとに、日本の民族学者は、1935年恩賜財団愛育会との協力によって「全国産育習俗調査」が実施された。その成果の一部は、1935年に恩賜財団愛育会『産育習俗語』として出版された。内容は、妊娠から出産を経て初誕生、さらに7歳にいたるまでの儀礼と「拾い親」のような出産にまつわる俗信、「子守とイズミ」と嬰兒の物理的安全を守る方法、子どもの健康を守り成長を祈るための呪法などに関して、どのような方言名が用いられ、どのような慣行があるかを記載したものである。その後、柳田は「全国産育習俗調査」をもとに、1941年に「誕生と成年式」（のち「社会と子ども」と改題して『家閑談』に収録された）を岩波講座『倫理学』七に収録した。内容は、「出振舞」「産立飯」「引揚着物と袖とほし」「取上親」「名付祝」「初あるき」「氏子入」「成年式まで」という項目に関して、いろいろな地方に見られる習俗を断片的に記述したものであり、それらの習俗の背後には、日本人の生命観や成長観があると考えて探ろうとしたものである。さらにその後、1944年には大藤ゆきが『児やらい』を発行した。内容は、七歳頃までの子どもの通過儀礼を中心とし、出産に関する俗信や育児に伴う呪法について地方の習俗の断片的な記述を収めている。また、坪井洋文は1971年に日本民族学によって集められた通過儀礼のさまざまな事例を整理して、諸通過儀礼のもつ意味を洞察し、その背後にある児童観や人間観を抽出して明文化した。そして彼は、日本の通過儀礼を誕生から成人に至るまでの生育階梯の儀礼を扱う出産儀礼、成人から婚姻、年祝いなどの成人階梯の諸儀礼を含む婚礼儀礼、死亡から何回かの年忌供養に至る死霊階梯の葬送儀礼、最終の年忌から以降（祖霊階梯）の先祖祭としての祭礼、年中行事、農耕儀礼を含む祖霊化儀礼の4つの段階に分けている。そして、1968年に同様な視点に立って、庄司和晃が人間の一生の過程を一覧表に整理している。⁴⁾

一方、祖父江孝男は日本における幼児期の儀礼の地域的差異に注目し、同一コミュニティ内の儀礼に関する調査を行った。

(2) 子生み、子育てに関わる産育習俗、通過儀礼

日本民族が、妊娠、出産、育児、成年という人生の諸段階をたどってゆく過程で、子どもがどのように周囲の人々とかかわっていくのかを見ていきたい。

ここでは、妊娠、出産、育児までの代表的なものについて、簡単に書き示しておくことにする。

なお、詳細については、参考文献をあげておいたので参照されたい。

① 胎児、出産の段階

・帯祝い

妊娠5か月の戌の日に、初めて腹帯をつけるという風習である。腹帯（着带式）は、日本古来からの独特なものであり、機械化された現代の最新医療の中でさえも未だに生きつづけ、しかも人間だけにある風習であると言われている。

腹帯をしめる儀礼に不可欠なこととして、共食という儀礼がある。これは、帯祝をもって胎児の存在、妊娠の公表を意味するものであり、生児の生存権の最初の承認であり、一つの重要な関門である。また、「間引き」の多く行われていた近世でもこの祝いの済んだ子は育てられた。また、「しめる、結ぶ」という行為は、そこに固定するという意味を持っており、腹帯をしめることによって、胎児の靈魂を安定するという意味を持っていたものと考えられる。

このように、共同体としての認識を持つ社会では、妊娠は個人の問題ではなく、ムラ社会全体の問題であった。したがって、妊娠に伴う儀礼には、ただ単に新しい生命を迎える喜びだけでなく、いかにして地域社会の一員として認めていくか、また、認められるかとしての意識が強くはたらいっていた。現代では、伝統的地域社会が大きく崩壊してきており、妊娠は、夫婦間、一家庭内での出来事として扱われており、少なくとも、地域社会全体の問題として認識されていない。

この様な時代にあっても、「腹帯をまく」という行為だけは受け継がれてきている。人々の心理的、社会的な意味は大きく、「腹帯」の存在意義は、まさに文化として継承されてきていると言える。

・たべもの

たべものは、母子の生命維持や、成長にとって不可欠なものである。

日本の食生活が「洋風化」「欧米化」から「飽食の時代」に入った今日、妊産婦の栄養指導内容の主なものは、体重のコントロール、妊娠中毒症、貧血、つわり等で、なかでも肥満の予防、改善の指導は、全体の90.0%を占めている。しかし、昭和20年頃までの妊婦の食生活は、禁食の伝承のみが強調されている。禁食の種類については、胎児に何らかの影響があるという型が多い。例えば、類感呪術的要素からの禁食、栄養の点からの禁食、妊婦の健康上からの禁食、妊婦の食生活の中である時期を区切った禁食などがある。また、反対に、積極的に食べることをすすめる食品もある。

いずれも健康な子を求め、安産を願う前代の人々の知恵がこめられていると言える。

また、出産予定の月に体内の子に元気付け、興奮させて、この世の一步を踏み出させん

とした精神的声援の儀礼として、臨月の祝がある。

すなわち、日常食膳に上がるたべものではない鯉、なまず、鮑など、動物性蛋白質の魚介類を妊婦に食べさせる特別食や、家族や近隣の人を招いて共食の「ハレ」の場として小宴を持った。

このように、妊娠とたべものに関する習俗をみると、これらの行為をとおして妊娠（胎児）を意識することであり、毎日の食生活を介して、母となる日への心構えをしていたものと言える。

・安産祈願

出産は病気ではなく、人間生活における生理的現象の一つというものの、妊婦にとっては生死にかかわる重要な出来事であるが故に、それに対する不安感も強い。従来、この不安感を解除する方法として、神仏への祈願とか、各種の呪術的行為を行うことが多かった。いわゆる「安産祈願」という名称で包括される習俗で、今日の産育習俗の中でも根強く継承されてきているものの一つである。

安産祈願の対象は、神仏、水の神、山の神、井戸の神あるいは家の屋敷神など、神と名付けられているものはすべてその対象となっている。そして、形態は、まず、著名な神仏に祈願し、素朴な呪術的行為を行い、なおかつ複合させて、時々神仏（流行神的な神）を重ね合わせて、より安全に出産できることを願っている。また、定期的に行う子安講やお産をひかえた家で臨時に行う子安講で安産祈願を行うところもある。

これらは、出産が夫妻だけの一軒の家のことではなく、地域社会全体のことであり、新しい生命を迎えようとする態勢にあることを確認することでもある。

この祈願は、医学だけでは解決のつかない多分に心理的な側面の強いものである。従って、神や習俗を失っている現代社会の妊婦にとっては、新たな不安や恐怖にさらされているとも言える。今日、出産は、産科の医学技術を万能視したようなあり方の反省期にあり、自然な分娩への注目が集まり始めている。ラマーズ法、マタニティ・スイミング、マタニティ体操などの盛況ぶりがそうした姿勢の現れであると言われている。

②乳児の段階（生後一年まで）

・三日祝

三日めは、「ミツメ」などといい、生後の成長過程において重要な節目になっていた。三という数字は、一種の聖数として扱われており、生理学的にも72時間位は、生死を意識する重要な時間だった。

着初め…手のおる着物を着せる祝い（テトオン）

生児の生命、あるいは靈魂が果たして生児の肉体に定着するか、それとも離れてしまうかが危ぶまれていた生後の3日間は、人間らしい手の通る着物を着せない風習がひろく見られていた。生後3日間にして、子どもは初めて手を働かすことの出来る人間らしい袖のある着物を着せられ、その社会的地位の第一歩を踏み出した。

湯初め…ミツカユ、ユゾメ

出産後三日目に、トリアゲバアサンが子どもを入浴させ、その後、産婦の家がトリアゲバアサン、手伝いの人を招いて会食する。

産湯の習俗には、人間の靈魂と水の関係を示すものが多い。産湯は、生児が初めて受ける大きな刺激であることから、その肌にふれる水も清潔であるべきである。呪的要素が強く、非科学的な行為とは言われるが、生児のすこやかな成長を願ったものであった。

生まれたての子どもが、生命を持続する上での強力な支持者たちが集まって協力の誓いをすることは、極めて心強いことであった。

髪剃り…赤児の産毛を剃り落す習俗で、生後三日目もしくは七日目に行う。

剃刀という道具が、鉄の利用が始まってからずっと後に、凡百の庶民階層にまで普及してからの習俗であるが、やはり過去の世界との絶縁、新しい人間界に心身ともに入り込んだ者、ということ表現する一つの形式だったものであった。

胎盤、へその緒などと共に、過去に身につけていた物の名残りとして、その処理に特別の注意が払われていた。

・名付け祝（お七夜、七日の祝）

出産後、七日をオヒチヤとかヒトチヤ（十七夜）と呼んで、生児の命名の日にしてきた。オヤと呼ばれる子どもの保護者が、この幼い生命の保護育成を受諾承認をしたことになり、この世に存在を位置づけることであった。

・出初め（初あるき）

生後、七日～三十前後（多くは二十日）に姑や産婆に連れられて初外出をする。忌明けを待って、小児に恐るべき危険の潜む場所（便所、井戸などの身近な神々）への巡礼によって、眼に見えぬ害敵への防御をはかる行為として行われていた。

・宮参り

地域社会の最高の地位にあるものに、承認を求める行為であり、通常、産婦の忌の明ける生後三十三日目、または三十五日目に産土神の加護を願って社参する。この日は、同時に祝いの食物を作って、近隣の人々にも配り、新しい生命が確立したという表現を示して、地域住民の承認を求める機会でもあった。

・初節句、初正月

生まれた子の世間に対する仲間入りを祝うこととして、初節句や初正月の贈答や祝宴が行われた。

・食初め

生後百日目から百二十日目の間におこなわれていた。ハシズメ、ハシゾロエなど箸に関する名称が多く使われていたことから、箸を使って食事をするという日本人の習俗に基づくものであり、一人で手を使って食べることが出来る人間になることを願った習俗である。

この時、生児の膳に小石を一個のせる風習がある。石のように頭が固くなれとか、歯が強くなれというものだと伝えている地方が多く、石という固い不安なものを媒体として、生児の生命力が体内に安置されることを願った親たちの行為であった。

・初誕生の祝

生後一か年目に行う行事である。歩く児に一升餅（力餅という）や米一升を背負わせ、子どもに生きる力をつけさせた。また、生児の将来の職業を占った。（ソロバン、筆、本、ものさし等をおき、子どもが最初に何を手にするかを占う）つまり、子どもの意志を尊重して、一個の人間として生きていく道を決めるものであり、完全な人間としての存在を認めていたことが現れている。

③幼児の段階

現在の11月15日に行われている七・五・三の習俗は、昔から行われていたように思われているけれども、決して古風を伝えたものではなく、まして全国一様の風習でもない。しかし、七・五・三の年齢（戦前は「数え年」を使っていたので、満六歳から七歳前まで、満四歳から五歳前まで、満二歳から三歳前まで）が、子どもの成長にとって大切な段階であると考えられていたことは事実であり、七歳は、氏子入りとして重く見られていた。

・三歳の祝

三歳という年は、乳児期をすぎて幼児期になる成長の一つのさかい目であり、大きな節目とされている。

三歳の祝には、今までの一つ身からきものを三つ身に仕立てて着せる三つ身の祝や、カミオキといって頭髪をはじめて結髪にする儀式があった。また、ミカグラといって餅をついて配るところもあった。

三歳は、一つの厄年であると考えられていたことから、厄年をのがれるために神事に参加し、氏神様から正式に承認してもらった。

・五歳の祝

五歳児も大きな脱皮時期であり、袴着といって男児だけの祝をするのが多いが、女兒にもオビを祝うところがある。

・七歳の祝

小児の祝は、七歳が最後で、これを境に少年としての仲間に入る。七つまでは神の子といわれ、この年を境として、はじめて大人の世界へ入る準備が開始される。

七歳という年齢は、心身の成長の重要な時期として認められていた。七歳から十四歳まで、子ども組とか子ども仲間という集団に入り、年中行事への参加、一人前の準備としての労働力づくり等、生活の知恵を身につけていた。

現在の小学校教育が、これらの歴史をうけついでおり、入学年齢がこの時期から開始されているのである。

以上みてきた様に、昔から人間の一生の間には、多くの習俗や儀礼があった。それは、子どもが、まず何よりも無事に育ってくれることを祈り、その後、子どものすくすくと成長して来たことを祝い、かつ今後益々健康に成長することを祈った。

氏神に祈り、神のお力添えを頼み、親戚や地域の人々を招いて喜びを共にしたのである。

4. 授業設計と展開

前項で述べた学習構想の視点と学習指導要領の諸点をふまえ、高校生の発達段階に応じた学習内容の編成を図り、授業設計と展開を試みた。

ここでは、「子生子育てを考える」をテーマに子の成長、つまり人格形成に重要な役割を果たす発達環境としての親の役割を自覚させることを第一のねらいとしている。

従って、今日、失われた部分にこそ大切なものがあつたのではないかという視点から、子生子育ての科学的、近代的な発展が持たらしめた様々な現象をとおして、今日の子生子育てについての問題や、その背景となる原因を考えさせ、子生子育てについての、自分自身の確固とした判断を持つことの出来る生徒の育成をめざしたい。

なお、学習内容としては、非科学的、非近代的と言われるかも知れないが、長い間、人間が守り伝えてきた知恵、すなわち習俗、通過儀礼についての内容を盛り込み、産育習俗や伝承儀礼のもつ今日的意義を理解させ、今後の子生子育てについて考えさせたい。

また、授業形態としては、民族学からの資料、事例を豊富に取り入れた講義やビデオ等と共に、フィールドワークによって、地域における事例を調査させる体験的、実践的な学習をとり入れたい。そして、グループ学習によって意見交換させ、よりよい子生子育てについての発達環境について考えさせたい。

テーマ：「子生子育てについて考える」

目標

- ・性のかかえる現代的問題を生物学的、社会的、歴史的な立場から考え、「生のあり方」として、性を主体的にとらえる力をつける。
- ・男女の肉体的構造のちがいを知ると共に、妊娠、出産のメカニズムを知り、母体環境の重要性を理解させる。
- ・乳幼児の成長過程を知り、保育環境の大切さを理解させる。
- ・子生子育てにかかわる諸問題の現状を把握させ、母体環境や保育環境について、どのような環境が必要なのかを、家庭内と社会的な面から考え、夫婦、家族、地域、社会の共同・協同の子育ての必要性について認識させる。

配当時間……15時間

- | | |
|----------------|---------|
| 1. 愛と性と結婚 | 2時間 |
| 2. 妊娠と出産のメカニズム | 2時間 |
| 3. 胎児と母体環境 | 2時間 |
| 4. 乳幼児の発達と保育環境 | 4時間 |
| 5. 共同・協同の子生子育て | 5時間（本時） |

本時の目標

- ・子生子育てに関わる現代の諸問題を把握させ、その背景について、現代人が失ってきたものは何かを考え、人間の成長に必要な環境について理解させる。
- ・子どもの人格形成は、知性ばかりでなく、感性、倫理性、社会性など

をあわせ持つ人間の育成であることを認識すると共に、伝承行事に見られる子生み、子育てにおける共同・協力の力の大きさをも認識し、その今日的意義を理解させる。そして、今後の子生み、子育てについて考え、親となる自覚を持たせるようにする。

授業の展開…… 5 時間

区分 時間(分)	学習内容	指導上の留意点
導入 50	<p>子生み、子育てにかかわる現代の諸問題を取り上げ、子どもを生み育てることへの不安が増大していることを資料より確認し、夫婦、家族、地域、社会の共同・協同の子育てが何故、必要なのかについて考える。</p>	<p>世界でもトップ°クラスに入る低値の乳児死亡率によって出産、育児に関しては、安心国であるかのように見えるわが国ではあるが、その一方で、登校拒否、アレルキ°一等の心身にわたる子どもの問題状況や受験競争などによって、子どもの自由な遊び時間が喪失していることや、また、人間関係の稀薄化によって、子どもをめぐる様々な問題が発生していることから、確実に、出産、育児への不安が増大している点に注目させる。</p>
展開 150	<p>①子生み、子育てに関わる伝承行事 前時までの学習内容を思い出しながら、胎児と母体、乳幼児の健康という観点から、わが国の伝承行事について民族学からの調査を紹介し、その内容について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人の児童観 ・産育習俗と通過儀礼 <p>②フィールド°ワークの発表 各人の地域における伝承行事の中から、子生み、子育てに関わる行事についてレポ°ートする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所 ・伝承行事の名称 ・目的 ・行事の内容 <p>③子どもの成長と地域社会 子どもの成長にとって、地域社会の果たしていた役割の事例をとおして、子どもの成長と地域社会との関わりについて理解する。</p> <p>④子生み、子育てに関わる現代の諸問題 子生み、子育てに関わる現代の問題をいくつか取り上げ、その</p>	<p>民俗学者によって、紹介されている産育習俗と通過儀礼についての資料を配布し、その内容を説明すると共に、その背景となっている子どものとらえ方(子ども観)についても説明する。</p> <p>生徒自身がフィールド°ワークによって調査した伝承行事について報告し合う。 前報(生活文化の教材化1, 2, 3)の金沢市の鬼子母神信仰の内容を紹介する。</p> <p>子生み、子育てから見た伝承行事に秘められている人々の真意について理解させる。</p> <p>かつて、地域全体で子どもたちが育てられていたことの事例を紹介し、その意義について説明し、理解させる。</p> <p>子どもの心身にわたる問題状況を調査資料より確認し、</p>

<p>まとめ 50</p>	<p>背景となっていることについて考える。</p> <p>伝承行事のもつ今日的意義を理解し、子生み、子育てに関わる現代の問題、背景から、出産、育児に真に求められているものは何かについて考え、夫婦、家族、地域、社会の共同・協同の子生み、子育ての果たす大きさを認識させる。</p>	<p>現代の子生み、子育てにおいて失われてきたものは何かについて考えさせる。</p> <p>前回までの伝承行事についての学習および子どもの成長と地域社会の関わりについての学習をとおして、伝承行事のもつ今日的意義を十分理解させた上で、今後の子生み、子育てについて考え、親となる自覚をもたせるようにする。</p>
---------------	--	--

おわりに

多くの産育習俗がもつ通過儀礼的性格には、その年齢に達するまで子どもが健康を保ちえたという個人的な祝賀の性格とともに、その年齢段階ごとに、地域社会の人々が、子どもの地位を承認するという意味を持っていたということである。

このような伝承儀礼が、誕生祝いまでの生後一年間の子の生命の不安定な時期、成長・発達の節目に集中して行われていたのは、私たちの祖先が体験的に、生まれた子の生命のはかなさを知っており、子の生命の安定や子の成長を念じていたからである。このことは、今日の医学、心理学等の知見から説明が可能であり、強く、深い愛の心と生活の知恵を先人の歴史的経験的な伝承儀礼のなかに、見ることが出来るのである。また、この時期の乳幼児は、強い依存性を持つ存在であることから、その発達環境、いわゆる母子関係が安定したものであるか否かが、その子の人格形成に大きな意味をもつことになることを、我々は忘れてはなるまい。

一方、子が成長していく過程で、地域社会の果たす意義は大きかった。近代までの習俗では、子どもの成長段階にしたがって、その教育に責任を持ち、それを支持育成する社会の範囲がほぼ定まっておき、現代のように、両親の権限のみが異常に広がるという形は見られなかった。従って、子どもにとっては、親以外にも近隣の人々や親類縁者によってその存在が承認され、支持されていたので、安心感が常に心の中にあつた。現代のように、子どもを理解し、支持してくれる仲間や目上の人々がすぐそばにいない環境の中では、子どもをめぐる問題の比率が増加していくのは、当然と言えるのではないだろうか。

現代科学にもとづいた育児法だけでなく、伝承によって伝えられてきた子生み、子育ての方法からも、大いに参考となるものがあるのではないだろうか。

注

- 1) 豊村洋子・生活文化研究グループ：生活文化の教材化（その1）－金沢市における産育信仰の形成－金沢大学教育学部附属教育工学センター教育工学研究 第13号
1987年9月
- 2) 豊村洋子・生活文化研究グループ：生活文化の教材化（その2）－産育信仰の定着過程－金沢大学教育学部紀要、教育科学編、第37号 1988年2月
- 3) 豊村洋子・生活文化研究グループ：生活文化の教材化（その3）－家庭科教育における産育信仰の役割についての考察－金沢大学教育学部、教育工学研究 第14号
1988年7月
- 4) 原ひろ子、我妻洋：しつけ ふおるく叢書1 弘文堂 1974年6月 pp24～33

参考文献

1. 恩賜財団母子愛育会編：日本産育習俗資料集成 第一法規出版（株） 1975年
2. 大藤ゆき：児やらい 岩崎美術社 1967年6月
3. 原ひろ子、我妻洋：しつけ ふおるく叢書1 弘文堂 1974年6月 pp24～33
4. 原ひろ子：子どもの文化人類学 晶文社 1979年2月
5. 千葉徳爾、大津忠男：間引きと水子－子育てのフォークロアー （社）農山漁村文化協会 1983年7月
6. 松岡悦子：出産の文化人類学 海鳴社 1985年7月
7. 横山浩司：子育ての社会史 勁草書房 1986年6月
8. 鎌田久子、宮里和子、菅沼ひろ子、古川裕子、坂倉啓夫：日本人の子生み・子育て 勁草書房 1990年3月
9. 和多美知子：暮らしの中の子育て考 中央法規出版 1992年1月
10. 増山均：子育ての新時代の地域ネットワーク 1992年8月
11. 日本子どもを守る会編：子供白書 草土文化 1994年8月